

【映画評】 ヴィタール

●監督・脚本：塚本晋也/主演：浅野忠信, 柄本奈美, KIKI・他/2004 年/日本/86 分/配給：ゼアリズエンタープライズ/2004 年ベネチア国際映画祭特別招待作品

●全国各地で公開中。詳細：www.vital-movie.com

●医師割：当日一般より 200 円引, 医学生割：当日学生より 200 円引

事故で記憶を失った医学生の博史は、解剖実習にのめり込む。やがて解剖中の遺体の女性涼子と自分との関わりを思い出し、彼女と一緒に過ごす幻覚を見るようになる。一方、現実の世界では、同級生の郁美が博史に激しい想いをぶつけてきて…。

* * *

本作は主人公の心の再生を二つのテーマのもとで描いている。一つは自己の獲得。博史は事故で記憶を喪失し、妄想の世界によりリアリティを感じているが、おそらく事故の前も、生の実感がない主体性の希薄な人生を歩んできた青年である。親の言うなりに医師を目指し、自身の満たされぬ気持ちの理由もわからないでいた。それが一度記憶を失って取り戻す過程で、記憶の奥にある自己を見つけていく。

二つ目は愛する者の死の受容である。記憶が戻るとつれ、博史は恋人の死を突きつけられるが、受け入れられない。妄想で彼女と愛を交歓し、現実では彼女の遺体解剖にのめり込む。解剖してその肉体の内部を隅々まで見つめることは、彼にとって彼女のすべてを理解し記憶しようとする愛の行為になっている。その作業を通じて、博史は目の前に横たわる恋人の遺体には意識が宿っていないことを悟る。

塚本晋也監督は「意識というものの不確かさと、不確かだがその中に真実も間違いなく隠されていることを描いてみたいと思った」と述べている。恋人の意識と主人公の記憶とは、かつて身体のどこに位



置していて、どのように消えたのか。

監督は、解剖に関する膨大な量の文献にあたり、解剖実習の見学なども含む取材を行ったうえで撮影に臨んだ(実習場面には、現役医学生らも出演)。医師になる第一歩ともいえる解剖実習。その目的は、身体を観察し人体の構造や機能を理解することであろうが、さらに「死と向き合うこと」「死を受容すること」をも求めているのではないか。

幻想と現実シーンの対比は印象的である。幻想では、海や空の青、生い茂る木々の緑などの色鮮やかな自然の中、亡き人であるはずの涼子が、のびのびとした肢体を躍らせて、生命の喜びや葛藤を表現する。他方、現実世界は鬱々とした雨が降り、暗く青ざめた色に染まって描き出される。想いを寄せてくる郁美も冷たい影をもつ。しかし現実世界の雨はやがてあがり、色彩が戻ってくるラストに安堵する。音楽活動休止中の Cocco が本作のために提供したエンディング曲「blue bird」も美しい。

クラシックバレリーナの柄本奈美が、その個性を活かして涼子を好演。郁美役の KIKI は切れ長の目が印象的で、不思議なオーラを醸し出す。そして、何よりも浅野忠信が、持ち前の雰囲気なのか、見事な演技というべきか、独特の存在感で主人公を演じており、圧倒される。(S)